

『世界に一つだけの花』を生かした学習の可能性を探る 簡単な作曲を目指して

高等学校

(音楽科)

1 はじめに

高等学校は、平成16年度より「自己啓発指導重点校」に指定され、県下でも生徒指導の厳しい学校の1つとして数えられている。また、その一環として学習に対するサポートの充実にも力を入れており、多くの教科で少人数制授業やチーム・ティーチングを取り入れ、基礎学力の定着に大きく貢献している。

しかしながら、それでも学習に対する苦手意識を持つ生徒は少なくなく、やる前から「自分には無理だ」と思い込む生徒は多い。音楽についても、歌唱や器楽であれば、得手不得手があるにせよ前向きな取り組みを見せてくるが、「作曲」となるととたんに拒絶し、「自分は楽譜も読めないし、ましてや書くなんで絶対無理！」といった具合になる。

クラシック界の偉大な作曲家たち、あるいは現代のJ-POP界のヒットメーカーのような作品を書くのははるか先の夢であるとしても、既成の楽曲を生かして、今の自分の音楽体験レベルでも「作曲まがいのこと」はできることを生徒に実感させるのが、今回の研究の趣旨である。「こんなのは作曲と言えない」とのお叱りを受けるかもしれないが、短いながらも自分のオリジナルの作品であることを実感させ、苦手意識の突破口を開くことが、まず第1の目的であることをご理解いただけたらと考えている。

とはいえ、高校生ともなると音楽体験も様々で、部活動や習い事を通じて基本的な音楽理論を身につけている生徒、趣味で楽器を始め、理論はわからなくても素晴らしい感覚と演奏技術を持ち合わせている生徒、苦手意識に支配されたまま今日まで来てしまっている生徒、とその差が著しい。そういった現状を踏まえ、どの生徒も持っている力を最大限に発揮できることを目標の視野に入れ、指導していきたいと考えている。

2 『世界に一つだけの花』へのアプローチ

今回の研究においては、『世界に一つだけの花』(槇原敬之作曲、教育出版「高校音楽 改訂版 MUSIC ATLAS」に掲載)を教材として用いる。知名度が高く、様々なアプローチができ、教材として優れた楽曲であると考えられる。

(1) 楽曲の概要・背景

この楽曲は2003年、人気グループ『SMAP』によってリリースされ、総売り上げ枚数が200万枚を突破する大ヒットとなった曲である。作曲した槇原敬之自身も2004年にセルフカバーしている。2007年には、文化庁・日本PTA全国協議会主催の「親子で歌いごう日本の歌百選」に選ばれている。

(2) 授業展開の可能性

この楽曲を授業で扱う場合にどのような内容で展開できるのか、今までに実践してきたことをここに挙げておきたいと思う。

歌唱

歌唱の音域は1オクターブと長2度で、無理なく歌うことができる。J-POPで有名な楽曲であるため、生徒はよく声を出して歌う。1学年の教科書に掲載されているので、1学期最初の歌唱教材として扱い、大きな声で歌う雰囲気作りに活用するとともに、『SMAP』にちなんで5人グループで実技テストを実施し、人前で歌ったりすることへの抵抗感の軽減、チームワークの育成に活用している。

歌詞の理解

メッセージ性が高く、「ナンバーワンにならなくてもいい、もともと特別なオンリーワン」という歌詞が象徴するように、競争よりも個性が大事だということを訴えている。中には「イラク戦争」と時期が重なることもあり「反戦歌」であると分析する人もいる。

楽典および楽曲分析

楽譜内に盛り込まれた楽典的内容に触れることに加え、J-POPに分類される楽曲の多くが、「前奏」「Aメロ」「Bメロ」「サビ」「後奏」からなる、ある定型のもとで作られていることを確認する。このジャンルの楽曲を扱うにあたっては、この確認の積み重ねが大事であろうと考えている。それ以外に、コードの連結・旋律の作り・リズムのパターンなどの確認をする。これらについては、後に詳述する。

振りをつけての歌唱

この楽曲には、「サビ」の部分にSMAPが踊る手話風の振りがある。これを活用し、歌いながら手を動かすことを実践する。意外とできない生徒は多く、リズム感を養う良いトレーニングとなる。手話合唱につなげることもできるし、小物打楽器でリズムを刻みながら歌唱することに発展させることもできる。同じ教科書に『風になりたい』（作曲：宮沢和史）が掲載されており、この曲がサンバのリズムを小物打楽器で演奏しながら歌唱するようになっていることから、私はこの前段階的位置づけとしている。

作曲

今回の試みの部分である。 の分析に基づき、それらの要素を段階的に利用して作曲を行ってみようと考えている。

(3) 『世界に一つだけの花』の楽曲分析

ここで簡単にこの楽曲について分析することとするが、その目的は楽曲の「分類化」「単純化」であり、楽曲を「詳述すること」ではない。骨組みを明らかにし、それを作曲に生かしていこうという試みである。もちろん、骨組みに肉付けをすることによって、楽曲に「色」がついて

いくのであって、発展学習の段階では「詳述すること」が大切であることを忘れてはならない。

全体構成（教科書の譜例に沿って）

オリジナルの楽曲とは若干異なるが、譜例の構成は以下のとおりである。

前奏（8 + 1小節）*教授資料のみに掲載	+	Aメロ（8小節）	+	Aメロ（8小節）			
+	Bメロ（8 + 1小節）	+	サビ（8小節）	+	間奏（8 + 1小節）	+	サビ（8小節）
+	間奏（2小節）	+	後奏（8 + 2小節）				

ここで確認できることは、楽曲の単位（楽節）は基本的には8小節であるということである。感覚的な言い方をすれば、8小節で区切れると収まりがよく、この楽曲での+1小節・2小節の部分は、聴き手を「おやっ？」という気持ちにさせるスパイス的な要素となっているのである。そして、歌詞からアプローチするならば、Aメロは「起」、Aメロは「承」、Bメロは「転」、サビは「結」の要素であり、楽節の雰囲気（性格）もそれによって変化しているということが言える。

各楽節のコード進行


単純化して分析すると、以下のようにまとめることができる。

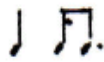
前奏	2拍ずつ - - - () を4回繰り返す形。(4回目は変化あり。)
Aメロ	2拍ずつ - - - か - - - (-) に集約できる。 Aメロ と は同じ。
Bメロ	- の連結で、下屬調 - 主調 - 屬調と転調。主調 - でサビへ。
サビ	2拍ずつ - - - か - - - (-) に集約できる。
間奏	前奏と同じ。2度目(2小節)は前奏のコード進行の4回目。
サビ	サビ の変形。コード進行は同じ。
後奏	サビのフレーズ(の一部)の繰り返し。

以上から、Bメロ以外はほぼ同じコード進行をしており、原則的に2拍ごとにコードが変わっている。T - S - D - Tの進行がほぼ全体を支配しており、非常にわかりやすいつくりになっている。

リズムの構成

歌詞の文字数により多少のリズム変化が認められるが、歌詞のあるAメロ、Bメロ、サビについては、ほぼ以下の4つに集約できる。

パターン	
パターン	
パターン	



Bメロでメロディーの雰囲気もコード進行も変わるにもかかわらず、楽曲に統一感が認められるのは、パターン化されたリズムが曲全体を支配していることによることがわかる。

(4) 楽曲分析からわかること

以上より、この楽曲の最大の特徴は、「コード進行とリズムに一貫性がある」ということである。言い換えれば、この2点に関してはそれほど多くの要素を含んでおらず、それらの要素を「形を変えて」繰り返し用いることで楽曲を構成しているのである。そして上では述べていないが、「形を変える」ことに大きく貢献しているのが「メロディーライン」であり、音の順次進行と跳躍進行の使い分けなどにより、フレーズ・楽節の表情を作り出している。つまり、少ない要素でも、200万枚を超えるヒット曲が作れるということに他ならない。

このあたりのことを生徒と確認し、「作曲は頑張ればできるもの」であることを印象づけ、作曲の課題に結び付けていきたい。

3 『世界に一つだけの花』を基にした作曲

この研究において1番のメインになる部分である。ある定型を与え、それに沿って作曲させることは一般に行われていることだと思うが、よく知られた楽曲を基にすることで、生徒の苦手意識を下げ、楽曲の一部を作る感覚で取り組めることを期待している。

(1) 基本的な考え方

先に述べたように、高校生の音楽体験の差は歴然としている。そのような中で、すべての生徒が、今現在持ち合わせている能力を最大限使って作品を作るにはどうしたらよいかはまず最初の課題であった。そこで今回は、集団での指導から始めるが、以降、課題をクリアした生徒から段階的に先に進んでいけるやり方をするとして。と同時に、あまりきちんと段階を踏みすぎると、逆に意欲をそがれてしまう生徒もいるため、そのあたりは弾力的に対応していくことも念頭に入れて進めていった。

(2) 作曲への伏線 ～五線譜についての基礎知識を身につける～

五線譜の理解についての差は大きいですが、コンピュータ等を利用できない環境下で作品を残すためには、やはり楽譜に書き留めるしかない。したがって、入学時から少しずつ「高音部譜表」について学習していく必要がある。高音部記号の意味と書き方、音符と休符の種類と書き方、拍子記号の意味、小節線・終止線の意味、変位記号の意味と書き方等をプリントを使って学習させた。また、実技テスト中や、やむを得ない自習時間を利用して「写譜」をさせ、「楽譜を書く」ということに慣れさせるようにしていった。

(3) 作曲の実践 ～段階的な作曲課題～

五線譜に関する基礎的な知識が一通りついたところで、実際に課題に取り組むこととなる。調性によって雰囲気が大きく変わることは言うまでもないことなのだが、わかりやすさを重視し、今回は「C dur」で行うことにした。また、本校の場合1回の授業が50分2時間であることを踏まえ、曲の長さは「4小節」とし、1回の授業で1～2作品を仕上げるようにした。そのほうが時間的な空白が生まれず、集中力が持続すると考えたからである。

課題については「段階的」に取り組めるようにし、具体的には4つの段階を設定した。

<音を選ぶ>

リズムとコードを指定し、和音の構成音から音を選び、リズムに当てはめる。

【STEP 1】～【STEP 3】

コードは2拍ずつ「C - F - G - Em(C) - Am(C) - F - G - C」とした。このコード進行は、『世界に一つだけの花』の「Aメロの後半」ないし「サビの後半」に当てはめることができる。リズムは2分音符だけのものからシンクペーションを中心とするものまで3つのステップを準備した。

指定されたコードの音から、リズムを構成するのに必要な数だけ音を選び、リズムと音を「組み合わせていく」作業を繰り返していく。機械的な作業なので、質を問わなければ誰でも取り組むことができる。【STEP 3】のリズムは『世界に一つだけの花』のAメロ後半のリズムを単純化したものである。

<音を作る～経過音の使用>

リズムとコードを指定し、基本的には和音の構成音から音を選ぶが、経過音の使用を認める。(リズムの変化は認めない。)【STEP 4】

の発展であり、リズムもコードも【STEP 3】のものをそのまま用いている。まだ若干オリジナリティーに欠けるが、経過音を認めることにより、メロディーラインに変化をつけることができる。順次進行と跳躍進行の組み合わせも可能となる。このときより、曲が主音(C)で終わるよう指示した。

<リズムを選び、音を作る>

リズムパターンから任意のリズムを選び、組み合わせてリズムを作る。コードについては指定し、和音の構成音を基本としてメロディーラインを考える。【STEP 5】

2分音符・付点4分音符・4分音符・8分音符の組み合わせからなる「2拍のリズムパターン」8つからリズムを選び、4小節のリズムをつくる。ここで初めてリズムの縛りを緩めることになり、リズムについてオリジナリティーが出てくる。メロディーラインについても、コードの指定は変わらないが、制限をより少なくすることにより、自由な発想でつくることが可能となる。

<リズムとコードを選び、音を作る>

リズムパターン、コード進行パターンから任意のものを選び、その組み合わせにより全体の構成を考える。【STEP 6】

最終段階。【STEP 5】での8つのリズムパターンと、コード C - G - C ・ コード C - F - C ・ コード C - F - G - C をもとに、それらを組み合わせて4小節の土台をつくる。あとは、【STEP 5】までのやり方に従い、メロディーを考える。できれば全員が到達できることを目標としたい。

(4) 実践において注意した点

プリント学習が中心となることから、以下の点に注意して授業を行った。

こまめにプリントをチェックする。

指示された内容がよくわからなかったり、楽譜の書き方等を事前指導したとはいえ、音符の棒の向きが違っていたりなど、小さなミスが最初は多く見られるため、机間指導を丁寧に行い、一人一人に細かく指示をした。また、多くの生徒がしているであろうミスが見つかった場合には、その場で個人作業の動きを止め、全体への説明を行った。

できるだけ音にしてアドバイスする。

紙の上の作業で音を具体的にイメージできる生徒は多くない。音楽は音になって初めて具象化するものであるので、できるだけピアノで弾いてアドバイスをするようにした。その際、違和感のある部分を自ら指摘させたり、それを何通りかの方法で修正し、一番自分のイメージに合うものを選ばせるなど、生徒の主体性を尊重するように配慮した。また、必要に応じて伴奏をつけたり、別の生徒の作品とつなげて弾いてみたりして、あたかも自分の作品が曲の一部になっているかのように感じられるよう支援した。

段階的指導からの逸脱も認める。

中には、ギターなどを独習し、「感覚的」に音楽づくりをした経験のある生徒もいる。そういう生徒には自らのやり方で曲を作ることも認めた。その際、数名に1台のキーボードと、数台のギターを用意し、使用することを認めた。

(5) 各ステップにおける評価

【STEP 1】から【STEP 6】までについての評価について、「評価規準表」にまとめておく。(P.8 4 指導実践例 (6)を参照。)それを点数化するにあたっては、様々な疑問が生じるところであるが、「ステップによって基準点と上限値を変える」「ルールからの逸脱が見られても、音楽として成り立っていれば問題視しない」「基準点を定め、そこに優れた内容について積極的に加点していく」といった具合で点数化している。最終評価はその生徒が行った一番難しいステップで行い、著しく問題があった場合には、その前のステップを評価した上で、評価が上回るほうを最終評価とした。

(6) 発展学習の可能性

今回のこの研究で行う「作曲」は、あくまで「作曲入門」的な位置づけでしかない。ある意味「本当の作曲」を行うにあたっては、授業中に様々な「下積み」をしなければならない。今後の研究のためにも、さらにどのような積み重ねをすべきなのかまとめておきたいと思う。

作曲を試みたことのある生徒（ほぼ全員がジャンルはJ-POP）に「作曲をするのに、まず最初何から考えるか」質問すると、いくつかの答えが返ってくる。第1の答えは「歌詞」。このタイプの生徒は「楽曲構造と歌詞の関係」を深く知る必要がある。最近の楽曲は構造が複雑なものも多く、例えば1番と2番でAメロやサビの長さが違ったりするものがある。しかし、その歌詞は紛れもなく「Aメロのための歌詞」「サビのための歌詞」なのである。

第2の答えは「コード進行」。これは、私には意外な回答であった。しかし、ギターを独習している生徒などはまずここから入るようだ。このタイプの生徒は「コードの種類とその連結」について深めることが大切である。私の出会った生徒の中に、暇さえあれば自分のお気に入りのコードを探している生徒がいたのだが、それをいざ連結するとなるとどうも違和感を覚えるようなものになってしまう。また「借用和音」なども自然と身につけているようだが、それを多用しすぎて効果が薄くなってしまったり、旋律の意味がわからなくなる傾向があるように思われた。感覚的な部分を大切にすることで、そこに理論の裏付けがあれば、聴き手が安心して聴ける楽曲に仕上がるはずである。

第3の答えは「旋律」。このタイプが多いと思っていたのだが、意外と多くはないようだ。ただ、ここから入るタイプの生徒は、基本的な知識が身につけている傾向が強く、感覚的に旋律を作っていくながら、自然と理論によって軌道修正できているように思われる。「構造」「和音」に加え、「音程」「音階」「調性」などの事柄と旋律との関係を考えながら作っていくことが大切であると思う。

いずれにしても、「作曲」という行為は、上に挙げたものの「総合的な成果」であるべきである。楽譜に対する基礎的な知識を身につけた上で、「どこから入っていくか」の違いなのではないだろうか。今回の「作曲入門」は「コード進行」から入ったものであり、作品の長さも4小節と短い。今後少しずつ必要な知識を補っていきながら、それを生かして「作曲のスキル」を高めていくことが必要であると感じている。

4 指導実践例（学習指導案【STEP 4】に該当）

日時 平成20年11月10日（月） 第5校時

場所 管理棟3階 音楽室

学級 第1学年A組（男子13名 女子8名 計21名）

学級観 おとなしい生徒が多く、比較的真面目な取り組みを見せている。吹奏楽やバンドなどに関わり、自身の音楽を深めている生徒もいる反面、全く音楽とは無縁だった生徒もあり、能力の差が大きい。男女とも数名意欲に欠ける生徒があり、動機付けが大きな課題である。また、自信の無さから積極的になれない一面を持っており、成功体験の積み重ねが重要であると思われる。

(1) 題材名

作曲にチャレンジしてみよう ~ 『世界に一つだけの花』を基にして~

(2) 題材設定の理由

作曲に対する抵抗は大きく、初めから「できない」と思い込んでいる生徒が多い。音楽の原点は「まねぶ」ことであるという視点に立ち、歌唱教材として学習したポピュラーな楽曲を利用してメロディーを作ることにより、作曲することに対してのハードルを下げるねらいがある。また、読譜に慣れていない生徒に音符に慣れさせ、今後の授業と合わせて、楽譜についての知識を習得させることを目指していきたい。

(3) 教材

プリント『世界に一つだけの花』を基に作曲する

(4) 指導目標

五線譜についての基本的な知識を身につける。

楽曲の基本構造について理解する。

2拍で構成されるリズムパターンを理解する。

楽譜を正確に書くことに慣れる。

メロディラインについて深く考える。

(5) 指導計画

『世界に一つだけの花』について分析する。 1時間

指定されたコードとリズムを用いてメロディーを作る。【STEP 1-3】 4時間

指定されたコードとリズムを用いてメロディーを作る。【STEP 4】 1時間(本時)

指定されたコードを用いてリズムとメロディーを作る。【STEP 5】 2時間

コードパターンを組み合わせその上にリズムとメロディーを作る。【STEP 6】 2時間

(6) 評価規準表

	題材の評価規準	学習活動における具体的評価規準
【観点1】 関心・意欲・態度	「作曲」という行為に関心を持ち、意欲的に音やリズムを考え、記譜しようとしている。	楽譜についての基礎知識をきちんと習得しようとしている。 和音・旋律などの要素に関心を持ち、与えられた課題を意欲的にこなそうとしている。 課題に対して複数の可能性を探ろうとする姿勢が見られる。
【観点2】 芸術的感受や表現の工夫	旋律や和声の響きを感じ取り、その良し悪しを判断し、適切に表現することができる。	記譜した音に対してイメージを持ち、響きを感じ、表現することができる。 音に違和感を持った際、それを適切に修正し、表現することができる。
【観点3】 創造的な表現の技能	既習の分析を基にして、より多彩な旋律を作ることができる。	旋律に対して明確なイメージを持ち、それを具体化するための手段を見つけ出すことができる。 順次・跳躍進行を効果的に利用できる。

(7) 本時の目標

分析によって得られた知識を基に、自分がどのようなメロディーを作りたいのかを明確にする。

キーボード等を利用して、自分が作ったメロディーがどのようなものかを確認する努力をする。

正確に楽譜を作成する。

(8) 本時の展開

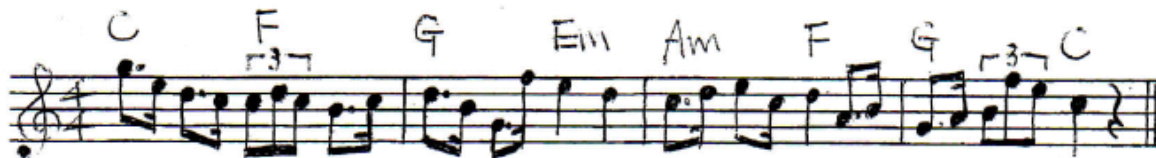
	学 習 活 動	指 導 内 容	指 導 上 の 留 意 点
導入 (15分)	校歌斉唱 出欠確認 本時の内容説明	校歌1番を斉唱する プリント返却【STEP3】 プリント配布・説明【STEP4】	大きな声で歌わせる。 前回提出したものについて一人一人に丁寧にコメントする。 今回の内容の趣旨をきちんと理解させる。
展開 (30分)	課題作成	【STEP4】に取り組む	机間指導をし、きちんと取り組むよう促す。 [観点1][観点3]
	課題試奏	キーボード等を使って自分の作品を音にしてみる	できるだけ自分の力で音にするよう促す。 [観点2]
	課題点検	必要に応じて教師がピアノで演奏し、アドバイスをする	生徒が作ったものを最大限生かしつつ、別の可能性を引き出せるようにする。 [観点1][観点2]
整理 (5分)	本時のまとめ プリント回収 次時の予告	本時の内容の再確認	次時へのつながりを明確にする。

5 生徒の作品・感想

以下に生徒の作品と感想を紹介する。

生徒A（男子生徒） 【STEP 5】を踏まえて、リズムを自由にアレンジしたもの。

最初は自信なかったけど、実際作ってみると、「もっといいものを作りたい」とか、「もっと印象に残りやすい曲を作りたい」という気持ちが生まれてきた。



生徒B（女子生徒） 【STEP 6】の作品。

曲の調とかよくわからないし、音楽のセンスはあまりないけど、今回の課題をやって、自分で（長い）曲が1曲作れたらカッコいいと思う。



6 おわりに

教科研究員という任を与えていただいたことで、色々と考えさせられることが多かった。私の高校時代の恩師は、同じ音楽の教員になった私に対して、「何でも貪欲に吸収するように」とよくおっしゃっていたのだが、教員になってから今まで、忙しさにかまけて逃げてきたことがたくさんあったように思う。その1つが「作曲の授業」であった。何度か試みようとしたことはあったが、「うまく生徒たちに伝えられなければしょうがない」「そもそも授業でやるのは難しすぎる」などと言い訳をして、結局やらずじまいであった。

今回「2年」という期限のうちに成果をまとめなければならないというプレッシャーのなかでこのテーマに取り組めたことは、逃げ腰になっていた私にとってとても有意義なことであったし、今までの自分を反省するよい機会にもなったと思う。

本文中何回か指摘したように、生徒の音楽体験は様々であり、その体験の差は大きく、指導する上で困難を極める場面も多々あるのが現状である。しかしながら、芸術という科目の中で「音楽」を選択しているからには、彼らの中で音楽は価値あるものと認めているに他ならない。そういった気持ちに合わせるべく、すべての生徒が「やればできる」ことを実感できる教材開発を心がけていきたいと思っている。「まとめ」というよりも、これからの自分への問題提起である。

最後になりますが、先の見えない手探りの研究に対し、貴重な指導・助言をくださった指導助言の先生方、教科研究員の先生方に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

世界に一つだけの花

作詞・作曲 沢村国太郎

The musical score is presented in two columns. The left column contains the vocal line and the right column contains the guitar accompaniment. The score is divided into sections labeled A through I, with corresponding chord diagrams and lyrics in Japanese. The key signature is one sharp (F#) and the time signature is 4/4. The score includes various musical notations such as treble clefs, stems, beams, and chord symbols (e.g., E, A, B, F#m, G#m).

Section A: 世界に一つだけの花 (World's only one flower). Chords: E, A, B, E. Lyrics: 世界に一つだけの花 (よきとちのなつめ).
Section B: 世界に一つだけの花 (よきとちのなつめ). Chords: E, A, B, E. Lyrics: 世界に一つだけの花 (よきとちのなつめ).
Section C: 世界に一つだけの花 (よきとちのなつめ). Chords: E, A, B, E. Lyrics: 世界に一つだけの花 (よきとちのなつめ).
Section D: 世界に一つだけの花 (よきとちのなつめ). Chords: E, A, B, E. Lyrics: 世界に一つだけの花 (よきとちのなつめ).
Section E: 世界に一つだけの花 (よきとちのなつめ). Chords: E, A, B, E. Lyrics: 世界に一つだけの花 (よきとちのなつめ).
Section F: 世界に一つだけの花 (よきとちのなつめ). Chords: E, A, B, E. Lyrics: 世界に一つだけの花 (よきとちのなつめ).
Section G: 世界に一つだけの花 (よきとちのなつめ). Chords: E, A, B, E. Lyrics: 世界に一つだけの花 (よきとちのなつめ).
Section H: 世界に一つだけの花 (よきとちのなつめ). Chords: E, A, B, E. Lyrics: 世界に一つだけの花 (よきとちのなつめ).
Section I: 世界に一つだけの花 (よきとちのなつめ). Chords: E, A, B, E. Lyrics: 世界に一つだけの花 (よきとちのなつめ).

(資料2) 作曲【STEP 1】～【STEP 6】プリント抜粋

『音楽にーんだけの死』を基に作曲する No. 1

____年 ____組 ____番 氏名 _____

1 以下の楽譜に従って作業をし、【STEP 1】～【STEP 3】を完成させてみよう。

(1) **【指定コード】** の音から **【指定リズム】** で記号なき音の型だけを書き込み、

(90) **【指定リズム】** **♪♪♪** **【指定コード】** の音の型

or **♪♪♪** は1つの音で置き換えているので、**【指定コード】** から「3つ」音を書き

(2) 選んだ音を書き換える箇所を定める。

(3) 宛めの楽譜とおり、リズムをつけて五線に記譜する。

(90) (a) (b) (c)

3つの音の 箇所を書き換える 五線に記譜する

【STEP 1】

【指定コード】 C F G Em Am F G C

【指定リズム】

(指定音)

(あなたの楽譜)

【STEP 2】

【指定コード】 C F G Em Am F G C

【指定リズム】

(指定音)

(あなたの楽譜)

【STEP 3】

【指定コード】 C F G Em Am F G C

【指定リズム】

(指定音)

(あなたの楽譜)

『世界に一つだけの花』を基に作曲する No.2

年 組 番 氏名 _____

2 【STEP 3】と同じ【指定リズム】を用いて、色々なメロディーを作ってみよう。

<ルール>

- (1) 【指定コード】を使うこと。ただし、コードに含まれない音を随機的に用いてもよい。
- (2) 【指定リズム】は変えないこと。
- (3) ただ音を並べるだけでなく、できるだけメロディーらしさを追求すること。
- (4) 最後の音は「ド」を用いること。

【STEP 4】

【指定コード】 C F G Em Am F G C



【指定リズム】 ド ド ド ド ド ド ド ド ド ド

(作品例)



×は随機的に用いた音

(あなたの作品)



『世界に一つだけの花』を基に作曲する No.3

年 組 番 氏名 _____

3 【指定コード】と【リズムパターン】①~④を使って、リズムとメロディーを作ってみよう。

<ルール>

- (1) 【指定コード】を使うこと。ただし、コードに含まれない音を随機的に用いてもよい。
- (2) 【リズムパターン】は①~④を1回ずつ用いること。同じリズムを2回以上使ってはならない。
- (3) メロディーらしさを追求すること。
- (4) 最後の音は「ド」を用いること。

【STEP 5】

【指定コード】 C F G Em Am F G C



【リズムパターン】 ① ♪ ② ♪ ♪ ③ ♪ ♪ ♪ ④ ♪ ♪ ♪ ♪

(作品例)



×は随機的に用いた音

(あなたの作品)

【リズム】

【完成作】



『世界に一つだけの花』を基に作曲する No.4

年 組 番 氏名

4 リズムパターン①～⑧とコード連結パターン⑧～⑩を使って、リズムとメロディーを作ってみよう。

<ルール>

- (1) リズムパターン①～⑧を用いること。同じリズムを2回以上使ってもよい。
- (2) コード連結パターン⑧⑨⑩を1回ずつ使うこと。同じコードが重なるときはそのコードを1度のみ使用する。(例：C-G-C-C-G-F-C)
- (3) メロディーを考える際は、コードに含まれない音を随機的に用いてもよい。
- (4) メロディーらしさを追求すること。
- (5) 最後の音は「F」を用いること。

【STEP 6】

リズムパターン① ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳

コード連結パターン⑧ ⑧ C-G-C ⑨ C-F-C ⑩ C-F-G-C

(作品例) ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳

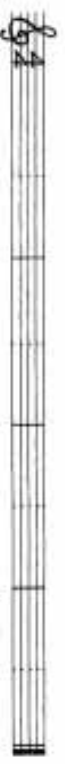


※は随機的に用いた音

あなたの作品

リズム

コード

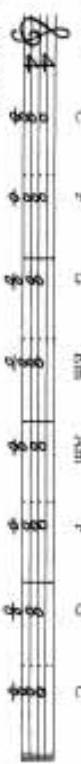


『世界に一つだけの花』を基に作曲する No.5

年 組 番 氏名

5 【まとめ】課題1～課題5まで、あなたができる課題を完成させてみよう。

(1) 指定コード



(2) 指定リズム



(3) リズムパターン

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳

(4) コード連結パターン

⑧ C-G-C ⑨ C-F-C ⑩ C-F-G-C

課題1 (1)と(2)を利用して作る。「メロディーを考える」



課題2 (1)と(3)を利用して作る。「リズムとメロディーを考える」



課題3 (2)と(4)を利用して作る。「コードを考え、メロディーを作る」



課題4 (3)と(4)を利用して作る。「リズムとコードを考え、メロディーを作る」



課題5 オリジナルの曲を作る。

